

京都府北部の貼り石方形墳丘墓について

野 島 永

1 貼り石方形墳丘墓の実例

近年、京都府北部において方形周溝墓や方形台状墓の周辺斜面に貼り石を用いた弥生時代の墳丘墓が分布することが明らかとなってきた。これらの貼り石方形墳丘墓の類例を概観し、以下にその概要を述べ、四隅突出型墳丘墓などとの比較を行い、若干の考察を試みることにしたい。

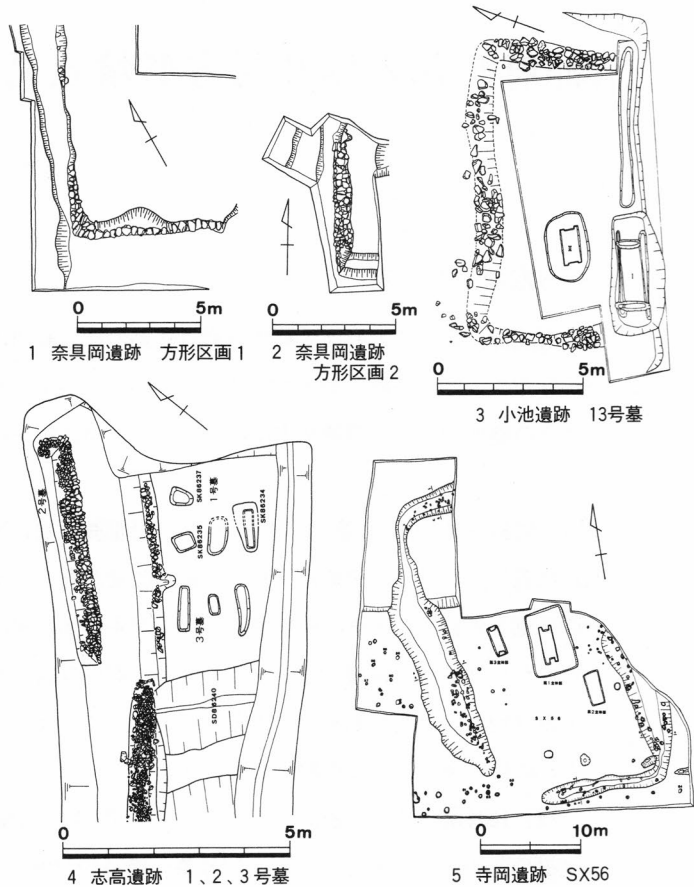
奈良岡遺跡 [奥村・林1986] (第1図1・2) 竹野郡弥栄町に所在する。標高約23mの丘陵先端部に位置しており、周辺地形図から後世の改変が著しいものと思われる。2基の貼り石方形墳丘墓と思われる区画が検出されているが主体部は検出されていない。方形区画1の周溝部分から弥生時代後期と考えられる壺形土器の口縁部や頸部が出土している。方形区画2からは明確な築造時期を示す土器は検出されていないようであるが、西辺北半部が方形区画1に伴う溝によって破壊されている。

小池古墳群12、13号墓 [鈴木・植山ほか1984] (第1図3) 中郡大宮町に所在する。北西に伸びる尾根の急斜面に位置しており、12号墓が標高約53m、13号墓が標高約49mに位置している。12号墓は明確な遺構が存在せず、詳細は不明である。13号墓は12号墓の北西に位置しており、墳丘長辺を等高線に平行させている。墳丘の三辺に貼り石を持ち、山側は溝状にカットされている。墳丘規模は長辺6.5m、短辺3.7mで、2基の組合式木棺の主体部は墳丘南側に寄っている。時期は周辺出土の弥生土器から中期と考えられている。

千原遺跡 [岩滝町教育委員会1988] 与謝郡岩滝町に所在する。部分的な調査のため、全容が不明であるが、第16、27グリッドから貼り石が検出されており、16グリッドから出土した土器から中期後葉の時期が与えられている。標高11m前後の丘陵の裾の低地に位置している。

寺岡遺跡SX56 [奥村編1988] (第1図5) 与謝郡野田川町に所在する。北に伸びる緩やかな段丘の東側に張り出した部分に位置しており、標高約32mのところ、墳丘長辺をほぼ南北に平行させている。墳丘は南北33m、東西20mの長方形を呈する。主体部は3基の組合式木棺と考えられる。第3主体部内から出土した土器から畿内第4様式に併行するものとされている。

志高遺跡〔肥後
ほか1989〕(第1
図4) 舞鶴市字
志高に所在する。
自然堤防上に位置
し、標高は約3m
である。計3基の
方形貼り石墓が検
出され、2号墓か
ら1、3号墓へと
築造されると考え
られている。とも
に中期後葉から末
に比定されてい
る。主体部は1号
墓で4基、3号墓
で3基の土壌が検
出されているが明
確な墓壇と考えら
れるものは1号墓
のSK86234のみで



第1図 京都府北部の貼り石方形墳丘墓

あり、箱形木棺が直葬されていたとされる。

以上が京都府北部において検出された弥生時代貼り石方形墳丘墓の概要である。主体部を含めての全容が解明されている例が少なく、比較検討が困難であるが、今後の研究課題としても若干の検討をくわえていきたい。

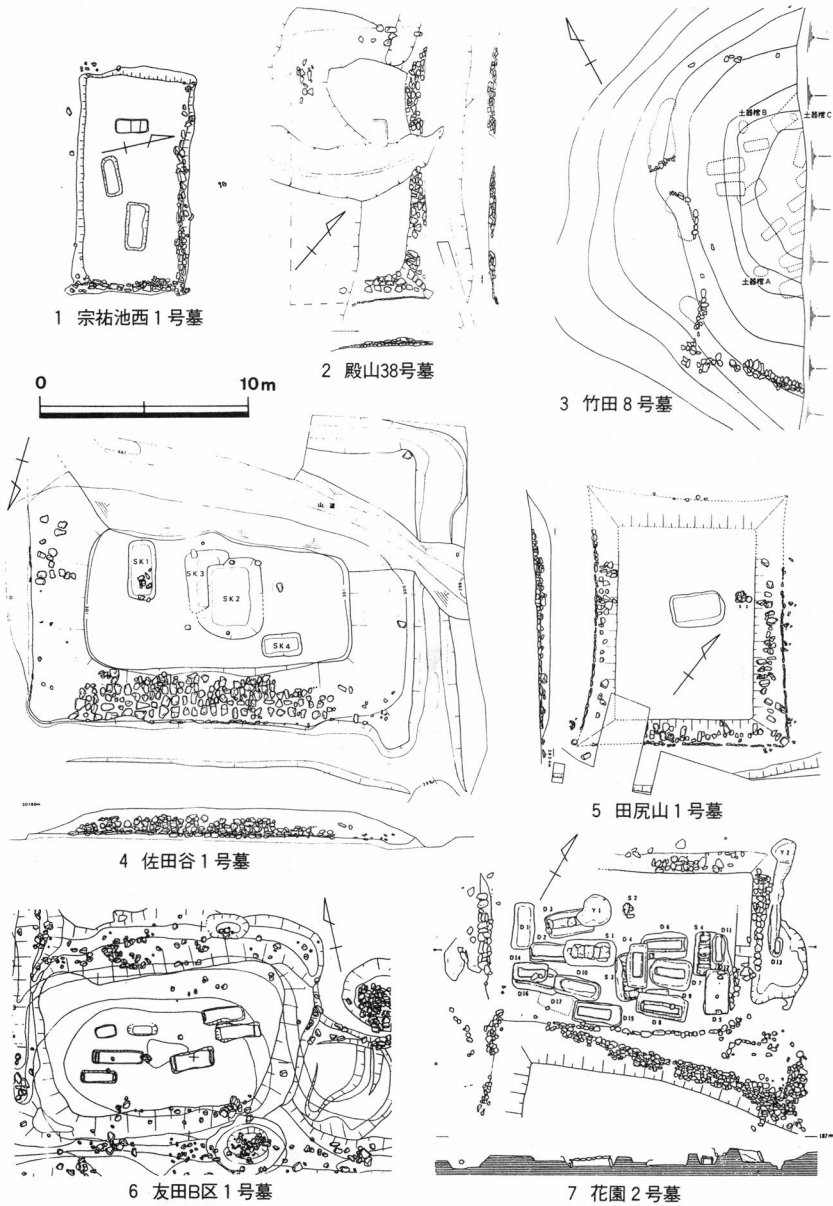
まずこれまで検出された貼り石方形墳丘墓は類例が少ないにもかかわらず、立地の点でかなりのバラエティが認められるということである。つまり、丘陵先端部の斜面に位置する例(小池13号墓)、緩やかな段丘面に位置する例(寺岡遺跡SX56)丘陵裾の低地に位置する例(千原遺跡)、河川の自然堤防上に位置する例(志高遺跡)などである。そして周溝内側斜面に貼り石を持つ方形周溝墓例(寺岡遺跡SX56)と丘陵斜面を削りだした墳丘に貼り石を持つ台状墓例(小池13号墓)が認められる。またこれらの貼り石方形墳丘墓の貼り石には角礫を積み上げる例(奈具岡方形区画2、小池13号墓)と板石を墳丘斜面に貼る例(奈具岡

方形区画2、志高遺跡1～3号墓)に分かれることも指摘されている(奥村編1988)。このことから京都府北部に点在する貼り石方形墳丘墓の「貼り石」は周溝墓や台状墓などの墳墓形態を越えて、各墳丘墓に付加的に備えられた一属性であることがわかる。またこれらの墳丘墓の築造時期は弥生時代中期後葉を中心とした時期に比定されており、時期的には近似した時期のものであり、現時点では後期後半にまで存続するものではないようである。そして寺岡遺跡SX56や小池13号墓などでは共に組立式木棺を主体部として持ち明らかに中心主体部が明確化されており、集団墓から脱却した段階のものとして捉えなければならぬであろう。

このような中期後葉を中心とした時期における貼り石方形墳丘墓は中国山地や山陰地方にも中心的に存在しており、主に四隅突出型墳丘墓との関連で論じられることが多い。これら中国山地における四隅突出型墳丘墓の初現的形態と考えられる例や中国山地、山陰地方に存在する貼り石方形墳丘墓との比較を行っていきたい。

2 中国地方の状況について

四隅突出型墳丘墓に関する論考は近年その名称を含めて多くのものがあり、突出部の形式的変遷にもとづいた近藤義郎氏のを画期として、桑原隆博、妹尾周三、渡辺貞幸、東森市良などの各氏の論考がある²。なかでも近藤義郎氏は四隅突出型墳丘墓の突出部の平面形態の変遷や斜面貼り石と墳裾石列の構造の変化に基づいた時期的段階の設定を行っている。これによれば広島県三次市の宗祐池西1号墓(中期後葉)[三次市教育委員会1980a](第2図1)や岡山県鏡野町竹田8号墓(後期初頭)[鏡野町教育委員会1984](第2図3)が最も四隅の突出部が微小で、墳丘裾の石列を伴わないという点からその初現的形態と考えることができる。これに継続する形態として、四隅の突出が微弱でありながらも墳丘裾の石列を部分的にせよ有するものになり、その例としては、広島県三次市殿山38号墓(中期後葉)[(財)広島県埋蔵文化財調査センター1987a](第2図2)、広島県庄原市田尻山1号墓(後期初頭)[向田1978](第2図5)、佐田谷1号墓(後期初頭)[(財)広島県埋蔵文化財調査センター1987b](第2図4)などが挙げられる。これらの墳丘墓の特徴は極めて近似した時期に築造されており、墳丘隅の稜線にそった平石の配置や墳丘裾の列石などに強い共通性を持つということである。この意味においては四隅突出型墳丘墓の初現的形態であるこれらの墳丘墓は四隅の貼り石の配置構造に強い規制を持ち、その築造に際しては長方形の墳丘の四隅に非常に明確な「貼り石」に対する意識が働いていたものと考えられる。しかし主体部の構造に関しては明確な共通性は認められない。中期後葉には2～3基の木棺墓が営まれるが、後期以降は備後地方を中心として石棺墓がその主体となるが卓越した

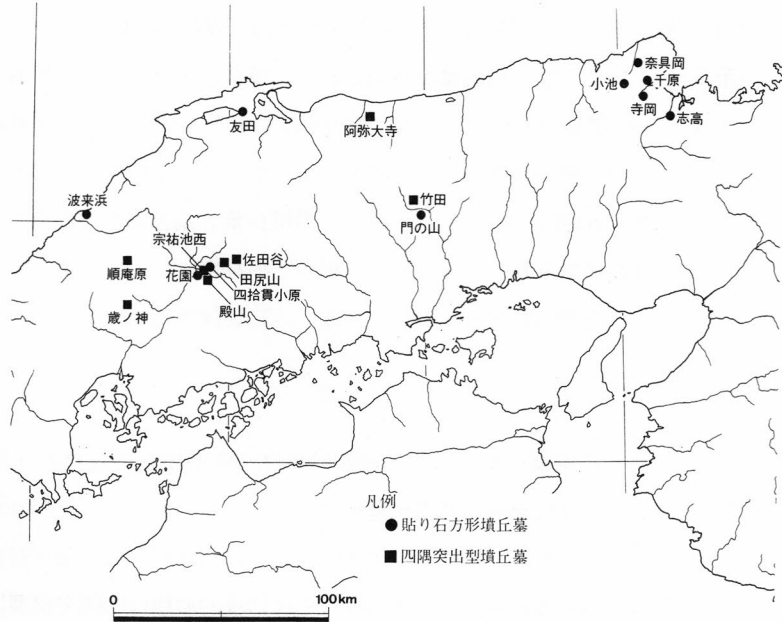


第2図 中国地方の四隅突出型墳丘墓と貼り石方形墳丘墓

主体部は一部を除いて後期後半以降に明確化する。このことから中期後葉から後期前半の四隅突出型墳丘墓は「貼り石」自体が墳丘墓の築造過程あるいはその葬送儀礼において、最も重要な属性となっていたことがわかる。

最後にこれらの四隅突出型墳丘墓の分布する地域に存在する貼り石方形墳丘墓について

みていきたい。中国山地では備後北部に点在している。広島県三次市の花園遺跡〔三次市教育委員会1980b〕(第2図7)では2基の貼り石方形墳丘墓が検出されている。第1号台状墓では土壙墓や箱式石棺墓など215基の主体部が検出されている。



第3図 各遺跡分布図(中期～後期前半)

墳丘規模は長辺が

約31m、短辺が約20mあり、北東の一隅は丸いカーブを描いて貼り石が配置されており、四隅突出型墳丘墓とは異なる貼り石の配置を採っている。弥生時代後期前半を中心とする時期が想定されているが、主体部の多さから考えれば集団墓として、一定の時期幅を考えねばならないであろう。第2号台状墓も土壙墓や木棺墓、箱式石棺墓など21基が検出されており、長辺14m、短辺9mの墳丘規模である。時期は出土土器から同様に後期前半とされるが、第1号台状墓に接する南側の一辺のみが石列によって画されていることを考えれば第1号台状墓に後続して築造された可能性がある。

次に同じく広島県三次市では四拾貫小原の弥生時代墳墓〔四拾貫小原発掘調査団1969〕がある。石蓋土壙墓など7基の主体部が検出された。墳丘の全面的な調査はなされていないが調査区の東南側に貼り石が認められる。残存状況が悪いため方形となるかどうかは不明であるが貼り石方形墳丘墓の可能性もある。時期は周辺から出土した脚付き鉢形土器から中期後葉と考えられる。

このほかには岡山県津山市の門の山第1号墳〔近藤・中島1952〕が挙げられる。平面形態は「野球のベース」上の五角形とされ、「方形」ではないが、四隅突出型墳丘墓とはその貼り石の配置状況が異なる点で注目できるものであろう。近藤氏によれば中期に比定される土器片が出土している³ということである。

一方、山陰地方でもこのような四隅突出型墳丘墓とはその貼り石の配置構造が異なる貼

り石方形墳丘墓が存在している。島根県松江市の友田遺跡B地区〔松江市教育委員会1983〕(第2図6)では6基の墳丘墓が検出され、土壙墓を主体部として持ち、一辺が5mから13mの長方形の墳丘の斜面に部分的に貼り石が行われている。時期は明確ではないが中期から後期前半の土器が周溝などから出土している。同じく島根県江津市の波来浜遺跡〔江津市1973〕ではA地区では貼り石を持つ方形墳丘墓3基と方形列石墓2基、B地区では方形列石墓7基が検出されている。共に方形の区画を施すために角礫を貼りつけており、特に四隅に対して意識的な配置は考えられない。墳墓群の時期は中期末から後期前葉であろう。

3 ま と め

以上のように中期後葉から後期にかけては四隅突出型墳丘墓とは異なる方形あるいは「五角形」の貼り石を用いた墳丘墓が中国地方の北半地域から京都府北部までの広範囲にわたって分布しており、現状では第3図のように京都府北部の貼り石方形墳丘墓はその東端に当たると考えられる。注目すべきことは初現的形態の四隅突出型墳丘墓は貼り石方形墳丘墓の分布範囲内に成立しているということである。これらの貼り石方形墳丘墓はその出現時期が中期後半にあり、現状では四隅突出型墳丘墓の初現的形態のものとはほぼ時期を同じくするものであるが、個別的にはその貼り石の配置の構造には四隅突出型墳丘墓に認められるような強い共通性は認められない。しかし主体部においては四隅突出型墳丘墓は土壙墓や石蓋土壙墓、石棺墓、木棺(木槨)墓などであり、在地的な埋葬方法を採用している。このために墳丘を持たない他の埋葬施設と著しい隔たりを全般的に認めることはできない。この点では貼り石方形墳丘墓も同様である。ただし、中心主体の顕在化は佐田谷1号墓木槨や寺岡SX56号墓第1主体などの両者に認められ、ともに集団墓を脱却した特定の地位の人々の墓と捉えられるものも存在する。したがって四隅突出型墳丘墓の初現的形態と貼り石方形墳丘墓の根本的な相違点は個別的には貼り石、列石の配置構造に表象されるといえる。しかし墓制としてみれば四隅突出型墳丘墓は地域を越えて特定の貼り石構造を共有するという埋葬儀礼における共通のイデオロギーを持つに至った墳墓であり、各共同体内の特定地位の人々の、生活単位としての共同体を越えたより大きな地域的集団への「統合」に対する自己同一性の表れの強さとも考えられるのである。このことによって四隅突出型墳丘墓は古墳時代初頭まで「継承」される地域的墓制として確立するのである。しかし「単なる」貼り石を持つ墳墓は後期には衰退し後期後半にはその検出例が認められなくなるのであり、地域的な墓制として古墳時代まで継承され得る存在とはなりえなかった。特に京都府北部ではこのような貼り石方形墳丘墓が5遺跡で複数例検出されているが後期以降は貼り石を用いない土壙墓や木棺墓が主流となる。このことはこの地域の各集団

が特定の墓制を継承していくまでの集団間の質的変化が遅れたためと考えられ、畿内周辺部という地理的環境が当地域での墓制の「継承」という現象を妨げていたのかもしれない。いずれにせよこのように考えるならば四隅突出型墳丘墓は貼り石方形墳丘墓の中からその社会構造の変質、つまり共同体内の特定地位の人たちがこの「統合」に向かって社会構造を変質させていったがために生れてきたものと考えることが可能であろう。

1世紀後半に班固が編纂した『前漢書』地理志燕地条には倭人が「百余国」に分立しているとされている。3世紀後半に編纂された『三国志』の魏書東夷伝倭人条では三十余の「小国」の名が記載されており、桓・靈帝の時期の「倭国大乱」を経て、倭人社会が百余国から三十余国に統合されていったと考えられている。このような中国史書に見える倭人社会の状況は弥生時代の墓制がもっともその状況を如実に語ってくれるものと考えられる。後期後半以降出雲地方を中心として展開する四隅突出型墳丘墓は中期後葉にその初現的形態を出現させ、早くにその型式学的な系譜が顕著に認められる代表的な墳丘墓であり、また統合に向かう倭人社会において「大乱」を乗り越えて存続し得るだけの墓制であったといえよう。そのことは弥生時代中期後葉以後既に墳墓における何らかの葬送儀礼の継承が行われている可能性を残しており、今後四隅突出型墳丘墓やその母体となったと考えられる貼り石方形墳丘墓の起源に関する問題は重要であるといえる。

小稿をなすにあたって北條芳隆氏、池淵俊一氏の御教示、御協力を得た。記して感謝致します。

(のじま・ひさし=当センター)

- 1 後述するように貼り石を持つ墳墓は台状墓や周溝墓として捉えられており、貼り石を持つ属性を重要視するならばこれらをまとめて「方形貼り石墓」という名称でもよいであろうが、四隅突出型墳丘墓とその墳丘規模においては明確な差がないため、貼り石を持つ墳丘墓を「貼り石方形墳丘墓」と呼称することにした。
- 2 参考文献参照。
- 3 [近藤1984] 参照。

〈参考文献、引用文献〉

- 岩滝町教育委員会 1988 『千原遺跡第3次』(京都府岩滝町文化財調査報告第11集)
奥村清一郎編 1988 『寺岡遺跡』(京都府野田川町文化財調査報告第2集 野田川町教育委員会)
奥村清一郎・林日佐子 1986 『奈良岡遺跡第3次発掘調査報告書』(京都府弥栄町文化財調査報告第4集 弥栄町教育委員会)
鏡野町教育委員会 1984 『竹田墳墓群』(竹田遺跡発掘調査報告第1集)
門脇俊彦 1971 「順庵原1号墳について」(『島根県文化財調査報告』第7集)
桑田俊明 1987 「1. 中国山地の四隅突出型墳丘墓について」(『日本考古学協会1987年度大

会研究発表要旨』)

桑原隆博 1986 「四隅突出型方形墓覚書(1)」(『芸備』第17集 芸備友の会)

江津市 1973 『波来浜遺跡発掘調査報告書』

近藤義郎 1977 「古墳以前の墳丘墓」(『岡山大学法文学部学術紀要』第37号)

近藤義郎 1984 「四隅突出型墳丘墓二題」(『竹田墳墓群』 竹田遺跡発掘調査報告第1集 鏡野町教育委員会)

近藤義郎 1985 「四隅突出型墳丘墓の出現と変遷」(『季刊文化財』53 島根県文化財愛護協会)

近藤義郎・中島寿雄 1952 「門の山第1号墳発掘調査報告」(『佐良山古墳群の研究』 津山市)

四拾貫小原発掘調査団 1969 『四拾貫小原』

鈴木忠司・植山茂ほか 1984 『京都府中郡大宮町小池古墳群』(大宮町文化財調査報告第3集 大宮町教育委員会)

妹尾周三 1986 「江の川中・上流域における墓制からみた弥生時代中・後期の社会—佐田谷1号墓の調査とその意義を中心として—」(『芸備』第17集 芸備友の会)

都出比呂志 1979 「前方後円墳出現期の社会」(『考古学研究』第26巻第3号)

東森市良 1989 『四隅突出型墳丘墓』(考古学ライブラリー54 ニュー・サイエンス社)

肥後弘幸ほか 1989 『志高遺跡 京都府遺跡調査報告書第12冊』((財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)

(財)広島県埋蔵文化財調査センター 1986 『歳ノ神遺跡群 中出勝負峠墳墓群』(広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第49集)

(財)広島県埋蔵文化財調査センター 1987a 『大判、上淀、殿山—三次市太田幸町所在遺跡群の調査—』(広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第57集)

(財)広島県埋蔵文化財調査センター 1987b 『佐田谷墳墓群』(広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第63集)

松江市教育委員会 1983 『松江圏都市計画事業乃木土地区画整備事業区域内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(含友田墳丘墓)』

三次市教育委員会 1980a 『宗祐池西遺跡現地説明会資料』

三次市教育委員会 1980b 『史跡花園遺跡—調査と整備—』

向田裕始 1978 「9 田尻山古墳群」(『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(1)』 広島県教育委員会)

山内紀嗣 1987 「9. 四隅突出墓」(『弥生文化の研究』8 雄山閣)

渡辺貞幸 1986 「古代出雲の栄光と挫折」(『日本古代史6—王権の争奪—』 集英社)

渡辺貞幸 1987 「2. 出雲と吉備の交流」(『日本考古学協会1987年度大会研究発表要旨』)